

コミュニケーション・スキルを身につけるための国語の学習：
海外における言語技術（Language Arts）の学習を参考に

黒 澤 純 子

愛知東邦大学

コミュニケーション・スキルを身につけるための国語の学習： 海外における言語技術（Language Arts）の学習を参考に

黒 澤 純 子

目次

1. はじめに
2. 国語教育の重要性
3. 現行の国語の学習指導要領
4. 海外における国語教育：カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州の例
5. 言語技術のテキストと学習法
6. おわりに

1. はじめに

文部科学省（以下、文科省）は平成25年12月13日、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」（文部科学省、2013）を発表した。その計画によると、2020年から現行の小学校第5、6学年の外国語（英語活動；実質上英語を指導しているため、以下英語活動）活動は教科となり、時間数は週3回（程度）に増え、中学年には英語活動が週1～2回導入される予定である。さらに、英語教育だけでなく国語の教育においては、小学校で計84時間増やす予定であることを発表した。時間数の増加に加え注目すべき点は、学習内容で古典の内容が新設される。さらに、「国語をはじめ全教科等で説明、論述、討論等の言語活動の充実」（文部科学省、2013）を図る方針であるという。

本稿では、英語教育の改革を目指す文科省の改革が次期学習指導要領に盛り込む予定である言語活動の充実に焦点を当て、英語教育の改革には国語教育のさらなる充実が必要であることを述べる。また、その中でも、「説明、論述、討論」などについて、現行の国語の学習指導要領ではどのようなになっているのかを概観する。そして、海外における国語教育（母国語である英語）の学習指導要領の内容と日本のものと比較する。その際、英語を母国語とする児童対象の科目であるため、アメリカとカナダの文献を引用し、具体的な学習指導要領はカナダのブリティッシュ・コロンビア州（British Columbia, 以下BC州）の小学校における国語教育（言語技術：Language Arts）の学習内容を参考にして、どのような項目に重点を置いているのか概観する。その内容を検討し、言語技術の学習項目のどの点を日本の言語教育は参考にできるのか考える。最後に、国語教育の充実は英語学習の充実にも重要なつながりがあることを述べる。

2. 国語教育の重要性

Cummins (2001) はバイリンガル教育、第二言語習得の研究において、個々のコミュニケーションの技術（スキル）をBICS (Basic Interpersonal Communicative Skills)、認知的・純理論的な言語能力をCALP (Cognitive Academic Language Proficiency)と名付けた。彼の長年の実験データから、第一言語の言語活動における機能は、第二言語における機能の予見になると主張 (interdependence of language hypothesis : 言語相互依存仮説) している (図1 参照)。図1を見ると、第一言語の表層部分 (見える部分) の特徴と第二言語の表層部分の特徴は互いに相容れないように見えるが、波線以下の下層部分 (見えない部分) の認知的・純理論的な能力においては第一言語と第二言語は基底言語能力 (Common Underlying Proficiency : CUP) では共有している。

言語相互依存仮説によると、第一言語においてCALPの能力が高い場合、第二言語においてもCALPの能力が高い可能性があるという (Cummins, 2001, p.118)。ただし、第一言語においてBICSの能力が高くても、第二言語のCALPに影響することは証明されていない。また、Cumminsの先行研究で、同じ主張をしているGenesee (1979) も、認知的な過程を要求するリーディングにおいては、第一言語のスキルが第二言語においても変換されやすい、と述べている。さらにGoldenberg (2008) も以下のように主張している。

... literacy and other skills and knowledge transfer across languages. That is, if you learn something in on language - such as decoding, comprehension strategies, or a concept as democracy - you either already know it in (i.e., transfer it to) another language or can more easily learn it in another language. (p.15)

カミンズもゴールドンバーグも同様のことを主張していることがこの引用からもわかる。つまり、第一言語で学習した事柄、例えば含意を読み解くこと、解釈法、あるいは民主主義のような概念は他の言語を学習する時に移行し、他の言語においても理解しやすくなると述べている。これを日本の小学校における英語教育に置き換えると、第一言語である国語で習得した事柄は、他の言語、本稿では英語に移行する可能性が大きい。つまり、英語教育改革を行うためには、まずは第一言語である国語をしっかりと身に付けることが重要かつ必然であることがわかる。特に、この2013年に文科省が発表した計画において、「説明、論述、討論などの言語活動」の充実がカミンズの言うCALPにつながる学習内容であり、ひいては児童たちの英語の学習においても要となるスキルになるであろうことは推測できる。

3. 現行の国語の学習指導要領

説明、論述、討論などの言語活動を充実させるためには今後どのような点に学習の主眼を置い

ていくべきなのだろうか。この章では現行の学習指導要領を元に詳しく解説されている学習指導要領、国語編から「話すこと・聞くこと」、「書くこと」と「読むこと」についての内容を抜粋し概観する。今回は英語教育との関連付けをするため、現在英語活動が必修になっており、かつ今後英語活動が教科になる予定の第5、6学年の目標のみを示す。

| | |
|-----------|--|
| | 第5学年及び第6学年 |
| 話すこと・聞くこと | 目的や意図に応じ、考えたことや伝えたいことなどについて、的確に話す能力、相手の意図をつかみながら聞く能力、計画的に話し合う能力を身に付けさせるとともに、適切に話したり聞いたりしようとする態度を育てる。 |
| 書くこと | 目的や意図に応じ、考えたことなどを文章全体の構成の効果を考えて文章に書く能力を身に付けさせるとともに、適切に書こうとする態度を育てる。 |
| 読むこと | 目標に応じ、内容や要旨をとらえながら読む能力を身に付けさせるとともに、読書を通して考えを広げたり深めたりする態度を育てる。 |

『小学校学習指導要領解説 国語編』、p.11から抜粋して作成
太字は筆者による

上記の3つの項目では、話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと的能力を身に付け、「態度を育てる」ことを目標にしていることがわかる。さらに上記の目標に達成するため、指導事項と具体的な言語活動例が挙げられている。ここではその中でも今後活動の充実を図る予定の「説明、論述、討論」と関連するであろう箇所を抜粋し、以下の表にする。

「話すこと・聞くこと」における指導事項と言語活動例

| | |
|-------|--|
| 指導事項 | <ul style="list-style-type: none"> 考えたことや伝えたいことなどから話題を決め、収集した知識や情報を関係付けること。 話し手の意図をとらえながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめること。 互いの立場や糸をはっきりさせながら、計画的に話し合うこと。 |
| 言語活動例 | <ul style="list-style-type: none"> 資料を提示しながら説明や報告をしたり、それらを聞いて助言や提案をしたりすること。 |

『小学校学習指導要領解説 国語編』、p.14, p.15から抜粋して作成
太字は筆者による

「書くこと」における指導事項と言語活動例

| | |
|------|---|
| 指導事項 | <ul style="list-style-type: none"> 考えたことなどから書くことを決め、目的や意図に応じて、書く事柄を収集し、全体を見通して事柄を整理すること。 |
| | <ul style="list-style-type: none"> 事実と感想、意見などを区別するとともに、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすること。 |
| | <ul style="list-style-type: none"> 引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書くこと。 |
| | <ul style="list-style-type: none"> 書いたものを発表し合い、表現の仕方に着目して助言し合うこと。 |

| | |
|-------|--|
| 言語活動例 | <ul style="list-style-type: none"> 自分の課題について調べ、意見を記述した文章や活動を報告した文章などを書いたり編集したりすること。 |
|-------|--|

『小学校学習指導要領解説 国語編』、p. 18, p. 19から抜粋して作成
太字は筆者による

「読むこと」における指導事項と言語活動例

| | |
|-------|---|
| 指導事項 | <ul style="list-style-type: none"> 目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実を感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読んだりすること。 |
| | <ul style="list-style-type: none"> 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述についての自分の考えをまとめること。 |
| | <ul style="list-style-type: none"> 本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること。 |
| 言語活動例 | <ul style="list-style-type: none"> 自分の課題を解決するために、意見を述べた文章や解説の文章などを利用すること。 |

『小学校学習指導要領解説 国語編』、p. 22, p. 23から抜粋して作成
太字は筆者による

上記の指導事項を見ると、「自分の考えをまとめる」、「助言や提案をする」、「自分の考えが伝わるように書く」、「自分の考えを明確にしながら読む」、「自分の考えを広げたり深めたりすること」など、様々な点からすでに「説明、論述、討論」に結びつく指導事項が挙げられている。しかし、いずれも「自分の考え」などを確認することとどまり、その考えに対する批評することや分析すること、また自分の考えをどのように理由づけしながら説明するのか、までの活動が明記されていない。次期学習指導要領は2020年の計画を念頭に85時間の授業時間数が増える予定である（文部科学省、2013）。コマ数に換算すると113コマ前後が増えることになり、学年あたりおよそ18コマが増え、今まで以上に細かな指導が期待できる。増える授業時間数を有効に使うには、どのような学習項目にさらに重点を置くべきなのだろうか。次章で英語圏の国語教育の学習内容を見ていく。

4. 海外における国語教育：カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州の例

カナダは10の州と3つの準州で成り立っており、政治・経済・教育などはそれぞれの州、準州が独立して行っている。本稿では、BC州の国語教育を見ていく。BC州では、教育省（Ministry of Education）が幼稚園から高校3年まで（K-Grade12）打ち出している日本の学習指導要領にあたるIntegrated Resource Package（以下IRP）を軸に、各学校がIRPの目標に到達する教育を目指している。小学校では学習する科目は9科目あるが、国語（母国語の英語）教育の目標と指導内容はどのような点に重点を置いているのだろうか。まず科目の名称についてであるが、英語を母国語とする英語圏の国々では国語（英語）はLanguage Arts（言語技術）と呼んでいる。なぜ母語

である国語の学習をEnglishと呼ばず、言語技術と呼んでいるのか。まずはLanguage Artsの概念を確認する。言語技術は以下の2つの概念で成り立っている。

Language is a structured system of rules that enable two or more people to understand the meaning of words, phrases, and ideas. Arts refer to the acquired skills, talents, knowledge, and imagination needed to produce meaningful communications. Language arts instruction involves the study of the systems and structures of language and language conventions (including grammar, punctuation, spelling, and handwriting). (Block, 2001, p.3)

言語とは、自分以外の複数の人間が言葉、語法、考えの意味を理解可能にするための系統立てた法則である。技術とは意味のあるコミュニケーションを生み出すのに必要な技術、才能、知識、想像性を獲得することを意味する。つまり、言語技術の指導とは、言語のシステムと構造の学習と、文法、句読法、綴字法、筆跡を含む約束事を学ぶことであるとBlockは述べている。三森氏は、欧米の言語教育は技術教科であり、その指導内容は「言語技術/コミュニケーション・スキル教育」(p.39)だと述べている。その教育には「話す、聞(聴)く、読む、書く、考える」という言語の全機能の教育が含まれている(三森、2003、p.39)という。

では、具体的にBC州の言語技術の目標と学習事項はどのような項目と内容になっているのか見ていきたい。この際、日本の児童と同対象の学年の5年生(Grade 5)と6年生(Grade 6)を取り上げる。Language ArtsのIRPはA 4版で5年生では174頁、6年生では176頁にわたっている。BC州のLanguage Artsの学習項目の柱は、“speaking, listening, reading, viewing, writing, and representing”の6つで、それぞれの要素が関係しあい互いに依存し合っている(IRP、p.15)。日本語の文脈で考えると、「話す、聞く、読む、書く」の4つの技能は日本人が英語を学ぶ際の重要な技能であるが、私たちが馴染みのない技能の“viewing”と“representing”について説明をする。“Viewing”とは、ボディランゲージ、ジェスチャー、動きを解釈すること、映画や映像などの科学技術的なメディアに反応すること、様々な形の芸術表現を鑑賞することで非言語の刺激から意味を獲得する能力を指している(Block, 2001, p.4)。また“representing”とは表現すること、意見などを述べること、主張すること、など自己を表現する技能である。これら2つの技能は日本の国語や英語教育においては独立した項目としてではなく、話すこと(スピーキング)の中に組み込まれる学習項目であろう。

次に、今後日本の小学校で充実させる予定の「説明、論述、討論」などの言語活動と関連する学習する項目をBC州の言語技術の項目と比較させるため、具体的な内容をIRPから抜粋していきたい。BC州教育省は前項に挙げた6つの学習項目を大きく3つ、1) oral language : speaking and listening、2) reading and viewing、3) writing and representingに分けて学習を支える柱としている。IRPはそれら3つの柱の項目の中に、それぞれの学習の達成目標を立てている。1)のoral language : speaking and listeningでは、情報を交換し、表現し、聞くために口頭言語を使用す

ること。2) のreading and viewingでは、学年に相応の様々なテキストを理解し、返答していくために、読み、考えること。3) のwriting and representingでは、多様な意味のある個人的、情動的、想像的なテキストを創り出すために書き、表現すること (IRP, p. 2) である。

さらに、どのようにその目標に近づくために学習するのか、言語技術を学習する上で「重要な概念」(Key concepts) があり、この「重要な概念」は言語技術の基盤 (IRP, p. 5) となっている。「重要な概念」は日本の文脈で考えると、学習指導要領の指導事項と言語活動例の両方の要素が入っているものと考えられる。以下の表はIRPの言語技術から5年生と6年生の部分を抜粋したものである。

| | 5年生 | 6年生 |
|---|---|--|
| <p>Oral language</p> <p>学年ごとの違いはテキストと状況の複雑さを経てより明確に区切られる</p> | <ul style="list-style-type: none"> 考えや視点を話して、説明すること。 話者のメッセージを解釈すること (言語的、非言語的にも)。 発表をしている時、聞き手のことを考慮すること。 読み書きに使う機器のことを明確に理解すること。 | <ul style="list-style-type: none"> 問題を解決すること。 考えを比較すること。 目的と観点を認識すること。 順序立てた取り組み項目の整理に役立つ体系表を使用すること。 情報を系統立て、話す練習をすること。 |
| <p>Reading and Viewing</p> <p>学年ごとの違いはテキストと状況の複雑さを経てより明確に区切られる</p> | <ul style="list-style-type: none"> テキストと個別的につながりをつけること。 テキストの中で考えや情報を比較すること。 テキストの下見分をし、情報の場所を確認するために読むこと。 ジャンルと形式を利用し、意味を組み立てること。 | <ul style="list-style-type: none"> テキストと個別的につながりをつけたことを描写すること。 テキストの中で考えや情報を分析すること。 考えと情報の重要性を確定すること。 構造と特徴を利用し、テキストの意味を構成し確認すること。 |
| <p>Writing and Representing</p> <p>学年ごとの違いはテキストと状況の複雑さを経てより明確に区切られる</p> | <ul style="list-style-type: none"> 様々な聞き手と目的のために書くこと。 意見とそれに代わる意見を表現することで考えていることを分析すること。 複数の情報にアクセスし利用すること。 文章の構成する中でパリエーションを利用すること。 | <ul style="list-style-type: none"> 様々な十分に練られた文章を書くこと。 批評を書くこと、あるいはその批評の正しさを証明すること。 目的によってジャンルと形式を選択すること。 言語の特徴と伝統的手法を利用して意味を強め、芸術性を高めること。 |

British Columbia Ministry of Education (2006). English Language Arts: Grade 5 & 6. IRP, p.7、訳、太字は筆者による

日本の国語の学習指導要領の指導事項と言語活動例の内容と比較すると、IRPの言語技術のそれらは、説明する、比較する、分析する、批評する、確認（定）する、系統立てる、証明するなど、より具体的な活動内容が記されている。日本の指導事項にあったように「自分の考えをまとめる」ことだけにとどまらず、その考えを主張するための裏付けができ、聞き手を説得する力を養うこと、そしてそれらをどのように発信するかの練習を行うことが明記されている。

5. 言語技術のテキストと学習法

この章では前章に引用したIRPの学習活動を指導するために、言語技術ではどのような教科書を使用し、どのような指導に重点を置いているのか見ていきたい。まず、授業を進めるに当たって重要なテキスト（教科書）¹であるが、BC州の教育省は今までIRPの目標に到達するために必要だと考えるテキストを推薦し、リストを挙げてきた。しかし、2006年を最後に推薦テキストの選定を止めた。それに代わるものとしてEducational Resource Acquisition Consortium (ERAC) という州学区の公立学校と独立学校 (Independent School²) の教員とその協力者が中心になって立ち上げている団体が、学校で使用するテキストの推薦と紹介を行っている。学区 (district) ごとに分けられている各学校は、どのテキストを選択するか学校の管理者と教師が行うことが可能である。現在では、教育省が以前推薦していたテキストを使用している小学校も少なくない。

BC州では説明する力や論述する力をのばしていくに、まず読む力を育てることを目標としている。各学校においてシリーズごとにセットになっている複数のテキストを使用しながら、ノン・フィクションのテキスト、フィクション、詩 (British Columbia Ministry of Education, English Language Arts : Grade 5, 2006, p.15) なども扱うことが推奨されている。また1冊の教科書の内容を進めていくだけではなく、“literature circles, book circle, journal writing, retelling” (McCormack & Pasquarelli, 2010) などの活動も行っている。具体的には、“literature circles”では文学作品を大まかに理解すること、そして最終的には作品を批評しながら本を読み進める読者、そして考察者を目指している (Hill, Johnson & Schlick Noe, 1995, p. xi)。“Book circle”では、3人から5人のグループごとに物語などを読み進めていき、個人的な感想をグループ内で話し合ったり、理解できない箇所を明確にしたり、作者の意図などを議論する (McMahon, Raphael, Goatley, & Pardo, 1997, p. xii)。どちらもグループごとに行う活動であるが、グループ分けは児童たちの本の選択、興味や読む力によって分けられる (Owens, 1995, p.2)。“Journal writing”は所謂読んだ本の内容の要約である。テキストを読み、その内容を自分の言葉で要約する活動である。“Retelling”はテキストで読んだ内容をできるだけ正確に自分の言葉で再現する活動である。いずれも日本の国語の授業においては馴染みのない活動ではあるが理想的な活動である。このような方法で、考え批評しながら読む力と表現力をつけるために実際どれくらいの時間がかかるのだろうか。IRPは3つの学習項目に費やす推奨する時間配分を掲げている。

| 学習項目 | 平均的な時間配分 | |
|--|----------|--------|
| | 5年生 | 6年生 |
| Oral language (speaking and listening) | 25-35% | 20-30% |
| Reading and Viewing | 40-50% | 35-50% |
| Writing and Representing | 25-35% | 30-45% |

British Columbia Ministry of Education, English Language Arts:
Grade 5, 2006, IRP, p.8,³

上記の表から学年が進むにつれ、Reading and ViewingとWriting and Representingの時間配分が多くなっていることがわかる。このように、様々な視点から児童たちの読む力、理解する力、表現する力、説明し討論する力を養うため児童が中心になって（student-centred）進める授業を行うよう努力されている。

次に具体的なテキストに沿って授業の活動内容を見ていく。ここでは以前教育省の推薦テキストCollections（コレクションズ）の5年生の最後の章について触れる。コレクションズは5巻物のテキストで、その中の1冊、*Exploring heritage*（先祖について調査する）の中の6頁にわたる章で、タイトルは“*We Are All Related*”（みんな繋がっている）を取り上げる。この章では1頁ごとに児童たちの作文とそれに伴うコラージュが掲載されている。6つの作品のうち1つの作品を取り上げる。コラージュの下方には、「みんな繋がっている」とは自分にとって、「僕たちは友だち、お互いに敬い、行儀よく振る舞い、安全に遊ぶことだ」と児童がメッセージを書いている。彼の先祖についての作文は以下である。

僕の名前はデレック・ブルホーズです。僕の家族はポルトガル出身です。このコラージュの中の年配者は祖父と祖母（僕のお父さんのお母さんとお父さん）です。写真の中でお父さんは僕を抱っこしています。僕は3歳でした。僕はコラージュに学校の図書館にある図鑑からみつけた釣り船の絵を描きました。ポルトガルの人々は釣りをたくさんします。僕も釣りが好きです。

コラージュの縁飾りは魚、太陽、三角形です。それらの絵は素敵だと思います。このプロジェクトは楽しくて興味深かったです。僕はポルトガルについて学び、お互いに敬うことの大切さを学びました。僕以外の人たちは、この先祖のコラージュを見て、その人たちとは違った文化について学ぶことができます。

Collections 5; Exploring heritage, p.75、訳は筆者による

同じページの下方にデレックの父親のノベルト・ブルホーズのメッセージ：「若い人々が私から学んで欲しい。うらぶれるのではなく、役に立ちたいのです。」も掲載されている。

以上の1頁の題材をどのように使って学習するのかを1つの例として指導案から見ていく。まず、児童たち個人の経験と結びつけることから始める。自分にとって年配の人とは誰なのかを児

童に考えさせる。クラス全体で、あるいはグループに分けて話し合いをする。同時に家庭での宿題として、家族の歴史についての情報を集める。その際話だけでなく、写真を見ること、家系図を書くなどの作業をする (Stenson, 1999, p. 100)。

次に、コラージュの中の文章は何に重点を置いているのかを考えながら内容理解をする。まず読み、思案し、最後に内容を反芻して読解する。例えば教師からの質問事項は、1) このコラージュを作成した児童は何を書いているのか。2) 年配の人は何と言っているのか。3) コラージュの中には何が描かれているのか。4) 作品を書いた児童にとって「みんな繋がっている」とはどういうことか、などである。さらに児童たちの様子を見て、理由づけしながら答える質問をしていく。例えば、1) あなたの両親はデレックのお父さんのコメントに賛成すると思いますか？なぜですか、またなぜそう思わないのですか。2) コラージュのどの部分が好きですか？なぜですか。どの部分があなたにとって心に残りますか。3) 「みんな繋がっている」というデレックの説明に賛成ですか？なぜそう思いますか、またなぜ賛成ではないのですか (Stenson, 1999, p. 101)、など全体の読解後には、より深い内容に踏み込んで議論することが提案されている。

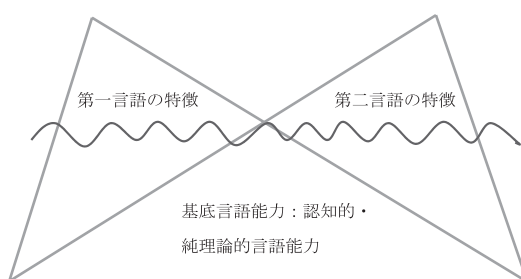
次に、“viewing”と“representing”の関連学習事項として、コラージュに何が使われているか、また使用可能な材料(写真、手書きの絵、文化的背景を表すシンボルや絵、コラージュを説明するキャプションなど)を児童に考えさせる活動もある (Stenson, 1999, p. 101)。その他にも文法の学習として、複数の文章を1つの文章に統合する練習などもある (Stenson, 1999, p. 103)。

さらに社会学習との関連として、年配の人々、例えば両親、祖父母、親戚の人たち、近所の人々にカナダの歴史を知るために自分の興味のある話を聞く活動を行う (Stenson, 1999, p. 105)、年配の人からのメッセージをグループごとに発表する方法として小冊子にする、コンピューターや手書きの絵や図などを用いて年配者からのメッセージを何らかの作品に仕上げるなど、児童たちが主体となって学んでいく姿勢を養っていく学習が多い。特にこの章は、移民が多いカナダの状況に合った内容の学習項目である。数多くの指導案の中で、どの活動を行うのかは指導者の学習目的と時間関係が大きく影響すると考えるが、上記の例一つの中に児童たちの祖先、歴史を知るために自分で調べること、周りの人々に聞くことなど、積極的な学習姿勢が求められ、教室内ではみんなと議論し、みんなの前で発表する活動が顕著であることがわかる。

6. おわりに

以上、日本の国語の学習指導要領の内容とBC州の言語技術のIRPを比較し、その後BC州で使用している教科書の一項目を抜粋し、その学習項目と学習方法の一部を紹介し、今後日本の国語の教育に参考にできる要素を考えてきた。先の章で述べたように、外国語でコミュニケーションできる力をつけるためには、まず第一言語である国語教育の充実である。即ち児童たちが母国語である日本語で系統立てて思考し、批判し、分析し、説明する、あるいは論述していく力をつけることができれば、日本語以外の言語、この場合英語の学習時の助けになり、またその充実につ

ながる。特に、カミンズの主張する認知的・純理論的な能力のCALPの獲得につながり、ひいては国語教育の充実は文科省が掲げる「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」（文部科学省、2013）の成功につながるであろう。またこの計画に盛り込まれている小学校の中学年から英語活動の導入と、高学年の英語学習の時間数が増加することはカミンズ（2001）の言う、BICS獲得の推進につながるであろう。次期の学習指導要領の改訂においては、第一言語の国語の習得内容が英語の学習と習得に重要な役割を果たすことを念頭に置き、論理的に思考し、発信する方法を習得し、自分の考えを伝達する能力を身につける学習内容に重点を置き、英語においてもコミュニケーションがはかれる具体的な内容にして、英語教育の充実を目指すことが望ましい。



Cummins (2001), p. 118の図を筆者が訳、再製作

図1：二か国語を話す能力の2つの氷山の図

注

- 1 カナダ、BC州の小学校について言及する時には授業中に使用する言語活動（Language Arts）の主な教材をテキストと呼ぶ。
- 2 BC州では、公立小、私立小に加え、独立学校（Independent School）がある。公立小学校に比べ小人数制で、文化的、宗教的、あるいは教育の方法が独特で、独自の教育理念を元に教育を行っている。1977年10月11日 Independent School Support Actが成立し、法的な認可と財政面で州からの補助金を受け運営している。それ以前は自校で財政を確保し運営していた。
- 3 元になる表では、学年の区切りがそれぞれ4年生と5年生、6年生と7年生（中学1年）の枠組みで作成されているが、本稿では日本の小学5、6年生に言及しているため、それらに対応する学年のみを抜粋した。

引用文献

- Block, C. C. (2001). *Teaching the language arts: Expanding thinking through student-centered instruction*. Boston: Allyn and Bacon.
- British Columbia Ministry of Education (2006). English Language Arts: Grade 5. Integrated Resource Package. www.bced.gov.bc.ca/irp/pdfs/english_language_arts/2006ela_k7_5.pdf より採取

- British Columbia Ministry of Education (2006).
 English Language Arts: Grade 6. Integrated Resource Package.
www.bced.gov.bc.ca/irp/pdfs/english_language_arts/2006ela_k7_6.pdf より採取
- Collections 5; *Exploring heritage*. (1998). Scarborough, Ontario: Prentice Hall Ginn Canada.
- Cummins, J. (2001). The entry and exit fallacy in bilingual education. In C. Baker & N. H. Hornberger (Eds.), *An introductory reader to the writings of Jim Cummins* (pp. 110-138). Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Genesee, F. (1979). Acquisition of reading skills in immersion programs. *Foreign Language Annals*, February.
- Goldenberg, C. (2008). Teaching English language learners: What the research does – and does not – say. *American Educator*, 32(2), 8-23, 42-44.
- Hill, B. C., Johnson, N. J., & Schlick Noe, K. L. (1995). *Literature circles and response*. Norwood, MA: Christopher-Gordon. Foreword by Short, G. K.
- McCormack, R. L., & Pasquarelli, S. L. (2010). *Teaching reading: Strategies and resources for grades K-6*. New York: The Guilford Press.
- McMahon, S. I., Raphael, T. E., Goatley, V. J., & Pardo, L. S. (Eds.). (1997). *The book club connection: Literacy learning and classroom talk*. New York: Teachers College Press.
- 三森ゆりか (2003) 『外国語を身につけるための日本語レッスン』 東京：白水社
- 文部科学省 (2013) 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」について
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/1342458.htm
- 文部科学省 (2013) 『小学校学習指導要領解説 国語編』 第7版 東京：東洋館出版社
- Owens, S. (1995). Treasures in the attic: Building the foundation for literature circles. In B. C. Hill, N. J. Johnson, & K. L. Schlick Noe (Eds.), *Literature circles and response* (pp. 1-12). Norwood, MA: Christopher-Gordon.
- Stenson, L. (1999). *Exploring heritage. Teacher's resource module*. Scarborough, Ontario: Prentice Hall Ginn Canada.

受理日 平成26年 9 月30日